

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2394000042		
法人名	医療法人双樹会		
事業所名	グループホームサマリヤの家		
所在地	愛知県新城市矢部字広見55番1		
自己評価作成日	平成25年 2月 1日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2012_022_kani=true&JgyosvoCd=2394000042-00&PrefCd=23&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	愛知県名古屋市長区左京山104番地 加福ビル左京山1F		
訪問調査日	平成25年 2月 9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自然の中で、ゆったりと過ごせる環境は居心地がよく、ホームは、いつも明るく活気に満ちている。「入居者がいい顔をしている」、「スタッフがいきいきと働いている」ことは何よりも自慢である。ケアは、「ゆっくり」「一緒に」「楽しく」を基本とし、今年度からは、新たに、「入居者本人の願いを大切に」と、個別対応ノートを作り、内容はともかく、入居者の「つぶやき」や「表情の変化」、「事実」、「ケアの成果」を書き込み、職員の目に見える形にした。さらに、個別に対応する取り組みを開始した。そうしたところ、職員は仕事へのやりがいや、喜びを感じ、「ケアの質をもっとよくなっていきたい」という前向きな姿勢がみられ、入居者の満足度につながった。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホーム開設から2年が経過し、支援の現場での安定感や充実度が感じられる。これまで、大きな病気にかかる利用者や入院する利用者は出ていない。職員のケアの向上もさることながら、管理者と長年仕事場を共にした看護職の存在も大きい。男性利用者の「開会の挨拶」で始まる運営推進会議がユニークである。外部からの参加者と共に、当日の勤務にあたっている職員と18名の利用者が全員参加する。全体会議(報告、意見交換等)の後、それぞれのユニットに分かれ、利用者9名が座談会を始める。家族をはじめ外部からの参加者は、この座談会をまわりで拝聴することになるのだが、これがまた楽しい。いつ何っても、利用者職員が活き活きとしたホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	・前回、「法人の理念でなく、グループホームとしての理念を前面に打ち出して進んでいくように」との意見をいただきましたが、管理者の意識の欠如から、職員の手による理念を打ちたてるまでに至らなかった。	ホーム開設から2年が経過し、支援の充実ぶりには利用者、家族共に満足度が高い。サービスの質のさらなる向上を目指して、法人理念に裏打ちされたホーム独自の理念の展開を画している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・地域の行事の参加の中では、おのずと近隣の方から声をかけていただいたり手を貸していただいたり、地域と一体になっている事を実感するまた、近隣の方や保育園児等の来訪を歓迎し、常にオープンにしている。	地域の保育園との交流や地域イベント(合同防災訓練等)への参加頻度も増し、地域との連携はさらに強固となってきた。調味料を切らしてしまい、隣家に借りに行くこともある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	・地域の人々への積極的な発信はできないものの、相談があれば話を聞いてあげたり、アドバイスができる場合は応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	・生活の様子がわかる写真を掲載したグループホーム通信を毎月配布している。今後は、入居者からのコメントも入れるようにしていきたい。運営推進会議での提案は、早急に活かしていく心がけている。	運営推進会議の開催日を、偶数月の第4金曜日と定めたことにより、定期的な開催と多くの関係者の参加が可能となった。毎回、利用者は全員が参加する。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	・平成25年1月22日に実施指導があり、法令順守とこれまでの取り組みの過程が評価された。今後も、折りあるごとに相談するなど、コミュニケーションを密にして理解と信頼を深めていきたい。	市役所担当者の運営推進会議への出席はないが、地域包括支援センター職員が参加しており、ホームの状況は行政に伝わっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	・身体拘束の対象となる具体的な行為、事例の確認を繰り返し行っていきたい。 ・玄関の施錠を外すことへの職員の意識改革が図れていない。心ある職員の手によって、解放する努力は行っている。中庭への出入りは自由になっている。	「自由」と「安全」の観点から、管理者は常に玄関の施錠の是非を意識している。家族アンケートにも、玄関の施錠に関する意見があった。	「施錠」が家族の不信感につながらないように、施錠しないことの意義・目的や施錠することによる弊害等を、家族をも含めて話し合う機会を作ってほしい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	・介護は1対1の対人援助であり、その場限りの無形のものであるため把握することが難しい。管理者やリーダーは入居者の声、情報をキャッチし、個々の職員の行動や言動の把握に努めるようにする。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	・1名の方が成年後見制度を活用していることで、実体験できてるものが、そもそも権利擁護が何なのかを学ぶ機会をもつようにしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	・これまで、特に問題が生じることはなかった。今後も、納得のいく説明を図っていききたい。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	・特に意見箱等の設置をしなかったけれど、意見や要望を職員や管理者に表すことのできるお互いの関係ができてきているのかと思われる。	運営推進会議やホームイベントへの家族参加が多く、意見や要望を聞く機会が多い。利用者・家族からの意見や要望は、主任会議やカンファレンス時に検討することとしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	・職員の意見や提案に耳を傾けて反映していると自分では思っているが、独りよがりなのかもしれない。もっと、自分を磨き成長しないと職員との距離ができ信頼関係が図れないと反省する。	全職員を対象とした個人面談の制度はないが、様々な機会をとらえ、管理者は職員の意見を聞き出している。「職員が育ってきた」との管理者の評価から、日々のケアは職員に任されている部分が多い。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	・人事考課などの仕組みがなく、男性職員から「結婚しても生計が成り立たない」との声が寄せられる。この声を法人組織にどのように伝え解決を図るのか、管理者の役割でもある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・職員の方から、「このような研修に参加したい」と積極的な申し出があり、法人サイドも大きな賛同があり、人材育成には力を注いでいきたい。また、資格獲得への意欲も高まっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	・近隣のグループホームの運営推進会議に職員が参加する機会を設けるなどしてケアの質向上を図っている。今後は、「交換研修」、「交流会」を通して意見交換の場もつくりたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	・「個別対応ノート」の提案があり、内容はともかく職員が日常の何気ない言葉、つぶやきを大切に、コミュニケーションを図る風土ができた。それは信頼関係の形成にもつながった。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	・些細なことでも電話で報告し、面会の折に生活の様子を伝えるなどを心がけ、これまで、良好な関係が保たれてきた。職員の間人性も大き関与するので留意していきたい。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	・利用者の担当ケアマネ、相談員等とも連絡を密にとり、現在の状況を把握するとともに、本人とその家族が困らないように配慮している。また、入所待ち状況は、正確な情報を提供している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	・一から十までお世話するケアでなく、入居者の意思を尊重し、できる事、出来ない事を見極め必要最低限の援助を心がける。また、職員は「私がやるから」と言って役割を奪わないように心がけていきたい。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	・家族の理解と協力は円滑な運営上欠かせない。そうした意味合いからも、家族を巻き込んでケアする事を心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	・来所して頂いた際は、気持ちよく対応し、「いつでも気軽に立ち寄って下さい」と伝えるように心がけている。外出は地域社会とのつながりを深め、身心の刺激にもなるので積極的に出かけるようにしている。	ホームと同じ建物内にショートステイ事業所があり、同じ出身地の人(ご近所さん)がショートステイの利用日にホームの利用者を訪ねて来る。ホームの利用者が、ショートステイの利用者を訪問することもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	・性格はそれぞれ違うものの、互いに思いやり、支えあう姿に微笑ましいものを感じる。しかし、中には、孤立しがちな方もおられるので、職員が仲立ちとなってつながり作りを担っていかねばならない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	・該当事例なし。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	・意思や一人一人の暮らしを尊重する「個別ケア」の意識が高まりつつある。願望を満たしてあげる事は、愛されている、大切にされていると実感することができ、人間として当然としての「欲求」を満たすことのできるケアを可能とする。	「個別ケア」の実践として、「個別対応ノート」を新規に作成して、利用者の思いや意向を引き出そうとしている。「魚釣りに行きたい」や「あん巻を食べたい」等々、利用者の思いが実現した事例がある。	「個別対応ノート」から介護計画につながった事例がなかった。思いや意向の大きさによっては、介護計画に取り上げて支援することも必要であろう。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	・お年寄りの「現在」とばかりに付き合うのではなく、澁刺として張り切っていた「過去」があった事を理解し、「過去」と「現在」をつなぐ援助が大切である。80年、90年と続いてきた人生の日々を尊重していきたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	・介護は日常性の尊重であり、生活は一人ひとり違う。その人らしく生活できる事を援助し、生きがいを失ったお年寄りが、再び生きがいを取り戻す事ができる手助けの為のアセスメントを心がけていきたい。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	・これまでは、家族の意向をうかがって、ケアプランに反映させてきたが、利用者の為のプランであるため、今後は家族と本人を交えて話し合いの場が持てるようにしていきたい。	管理者は、これまでの「課題解決」型の介護計画から、利用者の思いや意向を反映させた「生活支援」型の介護計画への移行を目指している。見直し時に、利用者、家族にも参加してもらう予定である。	利用者や家族が介護計画の見直しに参加すれば、利用者の思いや意向の反映は一段と増すこととなる。その人らしさの出た介護計画の作成に期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	・会話のなかでぼろっと話された事や来訪者からの本人のエピソードは、利用者側に立ったケアの実現につながるの、情報の共有ができるように工夫していきたい。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	・取り組みの事例なし。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	・取り組みの事例なし。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	・本人、家族の意思を尊重しつつ、かつ最適と思われる協力医のもとで医療がきちんと受けられる体制が整っている。	現在、全ての利用者がホームの提携医をかかりつけ医として通院受診している。看護師が職員として配置されており、通院の付添いや医療面での家族との情報共有の役割を担っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	・経験豊富な非常勤専従の看護師を配置し、日常的な健康管理や医療ニーズに対応できる体制を整えている。また、看護師、介護士によって定期受診や必要時の随時受信の援助を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	・かかりつけ医、緊急病院との連携は円滑に行われており、問題はなし。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	・時間の経過とともに重度化し、医療を必要とする事態に対し、本人、家族の意思、職員の能力、体制、医療との連携、家族の協力など足りない所は補いながら、可能な限りホームで過ごせるようにする意志の統一を図っていかなくてはならない。	家族からは「看取り」の要望はあるが、これまでに「看取り」を行ったことはない。医療依存度、主治医の意見、家族の協力、職員の介護力量等々、これらの条件がそろった時には「看取り」の実施を検討することとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	・経験不足と教育不足のため実践力に欠ける。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	・災害対策には、まだまだ不備な点が多すぎる。	建物全館にスプリンクラーの設備が配され、自家発電装置も備えている。2階のショートステイ事業所と合同で防災訓練を実施しているが、夜間を想定した避難訓練の実施はない。	マスコミ報道を見るまでもなく、夜間の災害発生時には人命に係わる被害が出る恐れがある。早急に夜間想定での避難訓練の実施を願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	・ 認知症にかかっている、お年寄りも目上の存在であるので、どんな時も自尊心を尊重する態度を崩さないように互いに注意しあっている。しかし、ユーモアと笑いは大切にしている。	職員は、言葉かけひとつにも、利用者それぞれに対して最もふさわしい言葉を選び、優しく対応している。家族アンケートにも、「職員の優しさ」を称賛する声が多かった。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	・ 土いじりの好きな方が多い。外で日光を浴びながら体を動かす機会ややりたい事ができる環境づくりを目指して取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	・ スタッフが走り回ったり忙しく仕事していると利用者のスペースに合わせて、ゆったり、ゆっくと支援することを心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	・ おしゃれを褒める事で嬉しいという気持ちが自信と生活に対する意欲につながっている。気に入っている洋服が着れるよう一緒にクローゼットから取り出したりコーディネートしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	・ 一人ひとりの好みに合わせた献立を利用者と一緒に考え作るといった当たり前の生活を少しでも取り戻していきたい。	2つのユニットが食事を分担して作っており、効率的な作業となっている。利用者が調理を手伝うことはまれであるが、当日の調査員へのお茶出しは利用者であった。	「餅つき」の日には、臼の「手を返す」利用者や、あんころ餅を器用に作る利用者の姿があった。個々の能力を見極め、日々の調理参加の頻度を高めることも必要か。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	・ 協力医より、糖尿病の方が、食事によって安定していると評価。何よりも皆さんから「おいしい」と言って喜んで下さることが一番。特に地元生産者の米は好評を得ている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	・ 毎食後の口腔ケアを行っている。また、協力医による口腔ケアも実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	・日中のおむつ使用者はなし。便意・尿意のない方も、全員トイレで排泄をおこなっている。夜間のオムツの使用者は1名となっている。	排泄パターンを把握したうえで、声掛けやトイレへの誘導、着衣の上げ下げ等を支援している。リハパン利用者が昼間だけは布パンツに改善されたり、着衣介助の必要な利用者が自立した例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	・排泄は羞恥心と嫌悪感という感情がある事を忘れずに援助を心がけていきたい。安易な下剤による排便コントロールをすることがなく、十分な水分摂取と食事の摂取によって排便が可能となっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	・どうしても、職員の都合によって1日おきの入浴になってしまうが、ゆっくりとお風呂につかってリラックスした気分が味わえるように配慮している。	入浴は1日置きが基本ではあるが、本人の希望によって連続して入浴することもある。元気がなかったり、食欲がない時などは、バイタルをとって入浴の可否を決めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	・一人ひとりの生活のリズムに沿って就寝準備の支援を行っている。その為最後の就寝時間は21時頃になっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	・良識ある協力医の存在は、情報の伝達や相談を円滑進めることができ、服薬に限らず健康保持に寄与し感謝している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	・人は誰も周囲から認められ、必要とされて初めて生きがいを見出す。その方の得意とする分野で役割を担ってもらう事は自分の居場所を確認する上でも大事にしていきたい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	・本人の希望を把握し、家族の協力を得ながら、ご本人の希望に添えるような職員の努力は、本人の生き生きした態度や楽しみ、張り合いのある暮らしの一助となっている。今後もさらに押し進めていきたい。	気候が良い時に、散歩は利用者3～4名に職員2名ほどで行い、利用者によって不公平にならないように配慮している。季節の花見が好評で、3月の梅見や4月の桜を、利用者と職員とが心待ちにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	・お金の管理能力に応じて所持をしていただいているが、物盗られ妄想が付随してくる。また、管理できない方に対しては、家族と連絡を取り、立て替え払いをするなどして、買い物支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	・電話は自由に使えるように設置しており、ご自分で電話をされたり、職員の援助によってやりとりができるようになっている。手紙についても、同様に、個々に応じて援助を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	・騒音がなく落ち着ける空間の設計となっている。しかし、平成24年9月トイブードルのチョコが仲間入りしたが、鳴き声がかたましく一変しお年寄りを混乱させている。今後の対応を検討中。	ホールは広くて明るく、掃出し窓のため採光が良く開放感がある。多目的に使用できる広い畳敷きの部屋があり、床の間には利用者の書いた掛軸が架けられていた。ベランダに干された洗濯物を、職員と利用者が取り込んでいた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	・共用空間はふすまと畳の和室にこたつを置き、フローリングはソファを設置し、気の合う利用者同士や、職員と一緒にゆったりくつろげる空間となっている。今後中庭に椅子を並べてティータイムができるように工夫したい。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・長年なじんできた家具やなじみの装飾品を持ち込んだり、思い出の家族写真に囲まれ安心して生活できるよう配慮している。職員も季節感、アットホーム的な雰囲気心を心がけている。	利用者それぞれが、自身の好みの部屋作りをしている。2匹の犬のぬいぐるみを、子どもをあやすかのように可愛がっている男性利用者がいた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	・入居者自身が、洗濯物を干し、取り込み、たたむ等日常の活動に参加しやすい環境設定となっている。また、対面式キッチン、食卓と一体となっており、安全に食事作りや、後片づけができるようになっている。		